

# 信州大学の学部を知る！

## ①人文学部

本県高校生や大学受験生の多くが受験する信州大学。その各学部の魅力をシリーズで、学部長インタビューを中心に紹介していく。

初回は、人文学部。山田健三学部長に、「実践知」を重視する、人文学部の魅力や教育内容などを聞いた。

### 学部の理念

## 「知」にあそび、「知」に生きる —機動する「知」へ

信州の大自然の織りなす四季のもと、都会の喧噪とほどよく距離をたもちつつ、時代や人間をみる確かな目と、他者や自然と共生できる豊かな感性を育む教育を行います。

複雑多様化し混迷する現代社会のあらゆる局面で、不断に根源的な思索を試み、それらに批判的・創造的にかかわっていくことのできる「実践知」を身につけた新しい時代の人文人(ネオ・フマニスト)を育成します。

### 人文学部の多彩なコース

- 哲学・芸術論コース**  
哲学・思想論分野／芸術コミュニケーション分野
- 文化情報論・社会学コース**  
文化情報論分野／社会学分野
- 心理学・社会心理学コース**  
心理学分野／社会心理学分野
- 歴史学コース**  
西洋史分野／東洋史分野／日本史分野
- 比較言語文化コース**  
比較文学分野／中国語学・中国文学分野／ドイツ語学・ドイツ文学分野／フランス語学・フランス文学分野
- 英米語学文化コース**  
英語学分野／英米文学分野
- 日本言語文化コース**  
日本文学分野／日本語学分野／日本語教育学分野

### ◆歴史ある信州大学人文学部の沿革

- 1919 大正8年 (旧制)松本高等学校設立
- 1949 昭和24年 信州大学(新制)発足 文理学部文科
- 1966 昭和41年 人文学部文科学科発足 文理学部を人文学部と理学部に改組
- 1978 昭和53年 人文学部を人文学部と経済学部に改組
- 2013 平成25年 二学科制から一学科制(人文学科)に改組。
- 2016 平成28年 改組完成。文理学部からの改組50周年。
- 現在、平成29年度に向けて、新たなカリキュラム改革を進めています。
- 2019 平成31年 前身である旧制松本高等学校設立から100周年を迎えます。

## 山田健三学部長に聞く 人文学部の魅力

### 知識を活用する“実践知”を重視 あらゆることに関心を持ち自分で考える力を

—まず、人文学部の魅力を聞きます。

**山田学部長** 信州大学は日本の真ん中に位置するため、全国から学生が集まります。県内出身者は約3割で、その他北海道から沖縄までいろいろな地方の出身者と知り合うことができる、という地域的な魅力があります。もう1つは、信州という土地柄でしょう。学問は都会でもどこでもできますが、いろいろなことを考えるためには、自然豊かでゆったりとした環境があることは大きなメリットです。

内容面での特徴は、人文学部では“実践知”ということを重視しています。知識や知恵という「知」を実践する力のことです。わかりやすく言えば、高校までに習う「知識」は名詞です。名詞のままでは「知っているもの」という静的な表現でしかなく、何かをするという動詞ではありません。知識を持っていることは重要ですが、それだけでは活かせませんね。例えるならば料理の食材のようなもので、食材は大事ですが、それを味わうには「料理をする」という動詞の部分が必要。それが“実践知”というもの。さらに言えば、本物の料理人は食材をきちんと吟味します。知識も同じで、しっかり吟味をして、それをどのように活用していくのか、そこが大変重要です。自分の持っている知識を吟味しようとする力を育てることが、人文学部で重視している部分です。

—具体的にはどのような教育を展開していますか。

**山田学部長** 高校と大学の授業で最も違うのは演習(ゼミ)です。人文学部ではいろいろな学問を扱います。人文の「文」とは、天文が「天の営み」、地文が「地の営み」を示すのと同じで、人の全営為を意味します。例えば、学問をする、戦争をする、人を救う、考える、絵を描くなど、すべて人間の営みです。

人文学部では、伝統的な哲・史・文はもとより、社会や心理、芸術、言語など多方面の分野を扱い、その各々の演習で、学生たちは関心のあるものや与えられたテーマから、必ず何か問題を探してくることを課されます。自ら考えるためには、「はい、そうですか」ではなく、「そこに問題はないのか」と疑いを向けることも必要で、一見何の問題もないようなことも、本当に良いのだろうか考える。その吟味をゼミで課していることも、人文学部の1つの大きな特徴です。

—社会でどのように活躍することを期待していますか。

**山田学部長** 人文学部を卒業すると、過去には教員になる人が多かったのですが、その他にも一般企業やマスコミなど様々な分野で卒業生が活躍しています。実は、そこそが人文学の最も重要なところだと考えます。

一般企業では「一般職(ジェネラリスト)」と「専門職(スペシャリスト)」という言い方をしますが、人文学部を出ると一般職に就きます。一般職というと、何となくスペシャリストより下位と感じるかもしれ



ませんが、実は全く逆です。「スペシャリスト」は決められた目的に関して対応できる人であり、「ジェネラリスト」は、最も重要な役割を担い、あらゆることに対応できる人です。全てがターゲットになるからこそ幅広い知識、「実践知」を持っているとよいですね。

特に、多くの難題(ジレンマ)を抱えるこの時代に、新しい方向性を与えるのは誰かといえば、正にジェネラリストです。戦後70年を支えてきた思考基盤を、未来に向けて再吟味していく、その根幹になるべきものを支えていく人たちに、人文学部では養成しているのだと考えています。

—人文学部を目指す学生に求めるものは何ですか。

**山田学部長** 人文学部の入試では、「総合問題」を取り入れています。これは、センター試験でははかれない能力を問うもので、あるテーマに基づいた評論や統計など様々なアプローチを組み合わせて出題されます。その最後の問いが、「あなたはどうか考えるか」というもの。そこが、人文学部の方針の表明ですね。

そういう設問への対策は、正直言って難しい。つまり、高校の勉強は当然大事ですが、それ以外のことに関心を持って、自ら考えるようになってほしいと我々は思っています。「教科書にはこう書いてあるけれど、別の考え方もあるのでは」と自分で考えたり、知り得た情報に対して「本当かな?」と頭を巡らすような、そういう知的な楽しみが好きな学生を求めたいですね。

人文学部では「知に遊び、知に生きる」という表現をしますが、日頃から様々なことに目を向け、勉強というより、関心を持つことがおもしろくて仕方がないと感じてほしい。幅広い興味の中で新聞も読むし、漫画も読む。映画も観る、音楽も聞く。社会的な出来事にも「自分ならどうか」と考えてみるなど、あらゆることに関わってほしいと思います。そして、情報を得る時は、ピンポイント的なネットより、新聞のように雑多な情報を全体的に見渡すことが大事ですね。あらゆることが人文ですから、たとえ好きではない分野、例えば科学や数学でも、その分野の人間が何をどう考え、それを利用してきたのかに関心を持つと、より物事を深く考えられるようになると思います。